
彼方と空汰

南方陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼方と空汰

【Nコード】

N1490R

【作者名】

南方陽

【あらすじ】

ただ駄弁る。ただそれだけ。

「なー彼方、帰りか？」

「そうだけど、どうかしたか空汰？」

「いや、やっぱり人間って、儚い生き物なのかなって……」

「深い！？お前いつから哲学者みたいな奴になったの！？」

「俺的にさ、やっぱり人間ってのは……」

「（ゴクリ）」

「かめは。波を幼稚園の時に試すか試さないかで、価値が変わってくると思うんだ……」

「ああ台無し！今までの前振りがもう台無しだよっ！」

「思えばさ、かめ。め波ってどこからか、か。はめ波なんだろうな？」

「あー、んー、なんか論点が180度逆走し出したけど、敢えてちやんとで答えるわ。」

「やっぱり。めはめ波っていうのは——」

「っふ！お前はまだ甘いわ！」

「まだ何も言つてねえ！？ お前は何を聴いたんだ！」

「しかし謎が多いよな、この論題。」

「もしかしたら、ポーズを構え始めた時かもしれないし、はたまた随分大声で『か。は。め。……』って羞恥塗れながらも言うところかもしれないし、

「いやはや『波~~~~~！！』って両手を前方へ勢い良く出す、

「実に筋トレとしては微妙なポーズの時かもしれないし……」

「うん、未だ嘗てここまでかめは。波を酷く貶しながら語った奴は、お前が初めてだと断言するよ」

「そんなことねえよ。『power』を『パウエル』と発音するお前には負ける」

「したことねえ！？ 何だその激しく俺が馬鹿だという、誤解を招きそうなお前の認識！」

「お、やっぱり分かったわ」

「ああ？ 何が？」

「やっぱり人間って、持ち物で決定してくるんじゃないかなあって……成るほどな。持ち物には、その人の嗜好が表れるし。結構良い視点だと思う」

「そんなわけで、まずお前の持ち物検査をしよう」

「何でそんな流れになっちまったんだろうな、そんな気はなかったのに。」

いいから俺のバックを漁ろうとするな

「よいではないか、よいではないか」

「そうやってすぐエロい方面に持っていくの、男子高校生の悪い性だと思う」

「あれ？ お前バック変えた？」

「あー、昨日側面が破れちまってな……」

「そっか。だが断る！」

「何に！？ ていうか断られても困る！」

なら俺はどうやって教科書とかを運べばいいんだよ！

「そりゃあれだ。手に持ったり脇に挟んだりして登校だな」

「俺の登校姿を見た人たち、どんな顔するかな。絶対憐れそうに茫然と見つめるに違いないぞ」

「俺なら後ろから蹴って、逃走するけどな」

「小学生かつ！ お前は悪質な小学校の高学年か！ 悪戯大好きっ子かつ！」

「よし、ここでバトルごっこしようぜ」

「どういう流れで!? 俺が程度の低い例えを使ったからか!？」

「つく、アイツ強すぎだろ……俺じゃ太刀打ちできねえ……!」

「……いきなり。まあいいけど——どんな敵だ？」

「ト。ンセル」

「かてえだけだよ! お前の攻撃力、皆無すぎるだろう!」

「思えば古い方の金銀版、三番目のバツチの奴が出すミルタン。がかなりうざかったよな。」

特にミルク飲みで粘るところ」

「ネタがマイナーすぎる」

「そう考えてくると、やっぱり見た目で敵の程度は測っちゃ駄目だと、俺は思っんだよ」

「例えば？」

「メタルス。イムの無駄に早い逃げ足とか、チコ。ータの無駄な可愛さとか。」

……ハアハア」

「怖ええ! ポケ。ンで萌えてるお前が怖いよ!」

「しゃーねーじゃん。モラトリウムな時期なんだよ」

「ふーん、そつか……ってなるか! 意味不明だよ!」

「さて、ここでモンスターの気持ちになりたいと思う。ということ
で勇者ごっこしよう」

「何か一気にぐだぐだだな。まあいいけど暇だし、元からぐだってるし」

「よし、お前農民Aな」

「コレ、絶対台詞がりピートするパターンじゃね？」

「つく、ここはどこだ? 俺は一体何者なんだ……」

「記憶喪失か。何か壮絶な始まりだな、割と」

「お、お前は……」。

よし、ここで会ったのも何かの縁だ。一緒にゲーセン行こうぜ」

「軽いっ! 記憶喪失中なのに男子高校生並みに軽い!」

「お、おいお前! 大丈夫かよそんな奴と歩いて!」

「空汰よ、一人で二役もすんなや。誰が誰だか分かんなくなるだろ
うが」

「いいじゃねーか。後三人は登場させっから頑張っつてついてこいよ」

「あー無理！ 俺には無理だそんな高等技術」

「そうか。そういえば、今って冬だよな」

「唐突！？ 話切り替えるスイッチが分からねえ！」

「よし、怖い話しようぜ」

「そしてそれは、夏にするべきなんじゃないかと、俺は思うんだけ
どなっ」

「ふふふ、お前ビビるなよ？ 漏らすなよ？」

「漏らすことはないと思うぞ」

「……溜め息を」

「あ、ごめん。絶対漏らすわ。ていうか既に漏らしてるわ」

「ある日、森の中、ピーちゃんが、夜に歩いていました」

「……」

「何でどっかの童謡みたいな始まり方なんだ？」

「すると、ガソゴソ、と後ろから音がしてきました……」

「おう、それで？」

「そこで振り返ってみると——なんと顔の右斜め上が欠けた、幾分
色の濃い人影が！」

「おお、なかなかそれっぽいじゃないか」

「そしてソイツは何か持った手を差し出して、ゆっくりと——こう
言って来たんだとよ」

「（ゴクリ）」

「お腹空いてるなら、僕の顔を食いなよ」

「ア。パンマンじゃねえか！」

「まじでホラーだよな」

「いやいや！ 何かネタになってるから！

……いや、でもまあ、聴きようによっちゃあな。

夜にアン。ンマンが森の中にいるシチュエーションは、確かに怖い」

「そうだな。……てか、しかし今日もなかなか盛り上がったな」

「空汰が一人で舞い上がったただけだと、俺は思うぞ？」

「あ？ 知ってるか彼方」

「何を？」

「お前が乗ろうとしてたバス、もう行っちゃまいそうなこと」

「早く言えよコノヤローっ！！」

（後書き）

なんとなく書いてみたくなりました。
こっという何気ない高校の帰り、羨ましいですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1490r/>

彼方と空汰

2011年7月8日03時29分発行